

Platelets reflect the fate of type II endoleak after endovascular aneurysm repair

井上, 健太郎

<https://hdl.handle.net/2324/4110404>

出版情報 : Kyushu University, 2020, 博士 (医学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

(別紙様式2)

氏名	井上 健太郎
論文名	Platelets reflect the fate of type II endoleak after endovascular aneurysm repair
論文調査委員	主査 九州大学 教授 塩瀬 明 副査 九州大学 教授 筒井 裕之 副査 九州大学 教授 山浦 健

論文審査の結果の要旨

【背景】

腹部大動脈瘤に対するステントグラフト内挿術 (EVAR) は、低侵襲治療として急速に普及したが、腹部大動脈瘤内への血流の残存 (エンドリーク) による大動脈瘤の再拡大という問題を有する。特に、腰動脈等の分枝からの瘤内への血流である Type II エンドリーク (T2E) は、自然消退することもあるため予後の予測が困難である。今回、申請者らは周術期の血小板数の推移に注目し、Type II エンドリークの予後との関連を評価した。

【方法と結果】

九州大学大学院医学系学府血管外科で EVAR を施行した 249 例を対象とした後向き観察研究を行った。まず、動脈瘤径拡大に寄与した (悪性) T2E を有する症例と瘤径拡大を認めなかった症例の EVAR 後 7 日目の血小板数の術前比を比較し、前者でその値が有意に低いことを明らかにした。

次いで、悪性 T2E の有無に対する血小板数の術前比のカットオフ値を算出し、T2E を有する症例を、高血小板数群と低血小板数群に分類し、術後の累積動脈瘤拡大率を比較した。

その結果、低血小板数群間で有意に動脈瘤拡大率が高いことが明らかとなった。多変量解析においても低血小板数は動脈瘤拡大の有意なリスク因子であった。

【考察】

術後の血小板数が低値であることは、術後の動脈瘤拡大のリスク因子である可能性が示唆された。

以上の実験結果はこの方面の研究に新知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験結果等について説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容およびこれに関連した事項について種々質問を行ったがいずれについても適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格とした。